

富山遺跡

発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



6-1998-589-01

1998
589
6

1998

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



1998 - 589

と やま

富山遺跡

発掘調査報告書

平成10年2月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



空中写真（真上から）右上南



II 5 C 層出土石器

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが平成7年度に発掘調査を実施した、富山遺跡の調査成果をまとめたものです。

富山遺跡は山形県のほぼ中央部に位置する寒河江市にあります。寒河江市は西に朝日、月山、葉山を望むことができ、南を山形県の母なる川最上川、北を寒河江川に囲まれた地で、「さくらんぼの里」として全国にその名を知られています。

この度東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）の建設工事に伴い、工事に先立って富山遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、前期旧石器時代と考えられる多数の石器が出土しました。分析の結果、全國でも稀な前期旧石器時代の石器製作遺跡であることが確認されました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成10年2月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例 言

1 本書は、東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）建設工事に係る「富山遺跡」の発掘調査報告書である。

2 調査は、日本道路公团仙台建設局（現東北支社）の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記の通りである。

遺 跡 名 富山遺跡（C S G T Y） 遺跡番号 平成元年度登録

所 在 地 山形県寒河江市大字谷沢字富山

調査主 体 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

調査期 間 平成7年4月1日～平成9年12月31日

現地調査 平成7年5月8日～平成7年7月20日

調査担当者（役職名は平成7年4月1日現在）

調査第二課長 佐藤 庄一

主任調査研究員 阿部 明彦

調査研究員 鈴木 良仁（現場主任）

〃 植松 晃彦

嘱託職員 須賀井明子

〃 押切 淳

〃 松田亜紀子

整理担当者

調査第一課長 佐藤 庄一

主任調査研究員 阿部 明彦（平成7・8年度）

〃 佐藤 正俊（平成9年度）

調査研究員 鈴木 良仁

嘱託職員 黒坂 広美（平成8年度）

〃 須賀井明子（平成7・8年度）

4 発掘調査にあたり、日本道路公团東北支社、山形県寒河江建設事務所、西村山教育事務所、寒河江市教育委員会等関係機関から協力をいただいた。

本書を作成するにあたり岡村道雄氏、鍛田俊昭氏からご指導を賜った。また、現地調査並びに資料整理にあたり下記の方々からご助言・ご協力を賜った。ここに記して感謝申し上げる（敬称略）。

相澤正信、阿子島功、阿部祥人、安斎正人、稻田孝司、織笠明子、織笠 昭、角張淳一、梶原 洋、加藤 稔、菊池政信、工藤敏久、小菅将夫、佐久間光平、佐藤雅一、渋谷孝雄、鈴木敏中、早田 勉、竹岡俊樹、手塚 孝、中澤 研、長友恒人、秦 昭繁、藤村新一、

町田勝則、松沢垂生、安井健一、山田晃弘、山田一郎、横山裕平

5 本書の作成は鈴木良仁・黒坂広美・須賀井明子があたり、本文の執筆は鈴木良仁が担当した。編集は丸山晶子・森谷昌央が担当し、全体については佐藤庄一が監修した。

6 竹岡俊樹、伊東裕輔・梶原洋、山田一郎の各氏から玉稿を賜った。それぞれ付編に掲載させていただいた。

7 委託業務は下記の通りである。

現地調査における平面図の作成 アジア航測株式会社

石器の実測・計画等の一部 株式会社アルカ

理化学分析 株式会社古環境研究所

8 出土遺物、調査記録については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

9 調査成果については、第9回東北日本の旧石器を語る会（1995年12月）、日本地理学会1996春季大会等で一部発表しているが、本報告書の内容がそれらに優先する。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

S K … 土坑 S D … 溝跡 R Q … 登録石器

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

(2) グリッドの南北軸は、磁北からはN-38°60'~W、公共座標からはN-46°66'70"~Wを測る。

(3) 遺構実測図は1/30・1/60・1/80・1/400・1/500縮図で採録し、各捕図毎にスケールを付した。

(4) 遺物実測図は1/2・1/3で採録し、各々スケールを付した。遺物図版については任意の縮尺とした。

(5) 石器計測表の計測値は、第9回の下段に示した部位の計測値である。

(6) 遺物図版中の番号は、捕図番号を示している（例 15-1は第15図の1を示す）。

(7) 石器観察表中の（ ）内の数値は、残存値を示している。

(8) 土層断面図・遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。

目 次

I 調査の経過	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	2
II 遺跡の立地と環境	
1 自然的環境	4
2 周辺の遺跡	4
III 遺跡の概観	
1 層序	5
2 遺構と遺物の分布	14
IV 検出遺構と出土遺物	
1 検出遺構	19
2 出土石器の器種分類	20
3 II 3 G層出土の石器	26
4 II 2層・II 3 C層出土の石器	89
5 II 4 C層出土の石器	89
6 II 5 C層出土の石器	89
7 出土石器の報告書取り扱いについて	90
8 石器の分析について	90
V まとめ	
1 出土石器について	125
2 遺跡の性格	125
3 石器の年代	125
報告書抄録	128
付編	卷末
I 富山遺跡II 3 G層出土の石器文化（竹岡俊樹）	1
II 富山遺跡出土石器の使用痕分析（伊東裕輔・梶原洋）	10
III 富山遺跡の赤色土（山田一郎）	13
IV 山形県富山遺跡の自然科学分析（株式会社 古環境研究所）	
1 富山遺跡の地質とテフラ分析	15
2 放射性炭素年代測定結果	20
3 富山遺跡の植物珪酸体分析	20
4 富山遺跡の熱ルミネッセンス年代測定	27

表

表 1 石器計測表(1).....	114	表 6 石器計測表(6).....	119
表 2 石器計測表(2).....	115	表 7 石器計測表(7).....	120
表 3 石器計測表(3).....	116	表 8 石器計測表(8).....	121
表 4 石器計測表(4).....	117	表 9 石器計測表(9).....	122
表 5 石器計測表(5).....	118	表 10 石器計測表(10).....	123

挿 図

第1図 遺跡位置図.....	1	第19図 石器実測図(5).....	33
第2図 調査概要図.....	3	第20図 石器実測図(6).....	34
第3図 遺跡層序(1).....	6	第21図 石器実測図(7).....	35
第4図 遺跡層序(2).....	7	第22図 石器実測図(8).....	36
第5図 遺跡層序(3).....	8	第23図 石器実測図(9).....	37
第6図 遺跡層序(4).....	9	第24図 石器実測図(10).....	38
第7図 遺跡層序(5).....	10	第25図 石器実測図(11).....	39
第8図 遺跡層序(6).....	11	第26図 石器実測図(12).....	40
第9図 遺跡層序(7) 石器計測部位.....	12	第27図 石器実測図(13).....	41
第10図 遺構配置図.....	15・16	第28図 石器実測図(14).....	42
第11図 S K 3 平面・断面図.....	17	第29図 石器実測図(15).....	43
第12-1図 石器分類図(1).....	22	第30図 石器実測図(16).....	44
第12-2図 石器分類図(2).....	23	第31図 石器実測図(17).....	45
第12-3図 石器分類図(3).....	24	第32図 石器実測図(18).....	46
第12-4図 石器分類図(4).....	25	第33図 石器実測図(19).....	47
第13図 II 3 G層石器分布図.....	27	第34図 石器実測図(20).....	48
第14図 條合遺物分布図.....	28	第35図 石器実測図(21).....	49
第15図 石器実測図(1).....	29	第36図 石器実測図(22).....	50
第16図 石器実測図(2).....	30	第37図 石器実測図(23).....	51
第17図 石器実測図(3).....	31	第38図 石器実測図(24).....	52
第18図 石器実測図(4).....	32	第39図 石器実測図(25).....	53

第40図	石器実測図(26)	54
第41図	石器実測図(27)	55
第42図	石器実測図(28)	56
第43図	石器実測図(29)	57
第44図	石器実測図(30)	58
第45図	石器実測図(31)	59
第46図	石器実測図(32)	60
第47図	石器実測図(33)	61
第48図	石器実測図(34)	62
第49図	石器実測図(35)	63
第50図	石器実測図(36)	64
第51図	石器実測図(37)	65
第52図	石器実測図(38)	66
第53図	石器実測図(39)	67
第54図	石器実測図(40)	68
第55図	石器実測図(41)	69
第56図	石器実測図(42)	70
第57図	石器実測図(43)	71
第58図	石器実測図(44)	72
第59図	石器実測図(45)	73
第60図	石器実測図(46)	74
第61図	石器実測図(47)	75
第62図	石器実測図(48)	76
第63図	石器実測図(49)	77
第64図	石器実測図(50)	78
第65図	石器実測図(51)	79
第66図	石器実測図(52)	80
第67図	石器実測図(53)	81
第68図	石器実測図(54)	82
第69図	石器実測図(55)	83
第70図	石器実測図(56)	84
第71図	石器実測図(57)	85
第72図	石器実測図(58)	86
第73図	石器実測図(59)	87
第74図	石器実測図(60)	88
第75図	II 2層遺物分布図	91
第76図	II 3C層遺物分布図	92
第77図	II 4C層遺物分布図	93
第78図	石器実測図(61)	94
第79図	石器実測図(62)	95
第80図	石器実測図(63)	96
第81図	石器実測図(64)	97
第82図	石器実測図(65)	98
第83図	石器実測図(66)	99
第84図	石器実測図(67)	100
第85図	石器実測図(68)	101
第86図	石器実測図(69)	102
第87図	石器実測図(70)	103
第88図	石器実測図(71)	104
第89図	II 5C層遺物分布図(1)	105
第90図	II 5C層遺物分布図(2)	106
第91図	剝片計測分布	107
第92図	石器実測図(72)	108
第93図	石器実測図(73)	109
第94図	石器実測図(74)	110
第95図	石器実測図(75)	111
第96図	石器実測図(76)	112
第97図	石器実測図(77)	113
第98図	土層断面記録	124

図 版

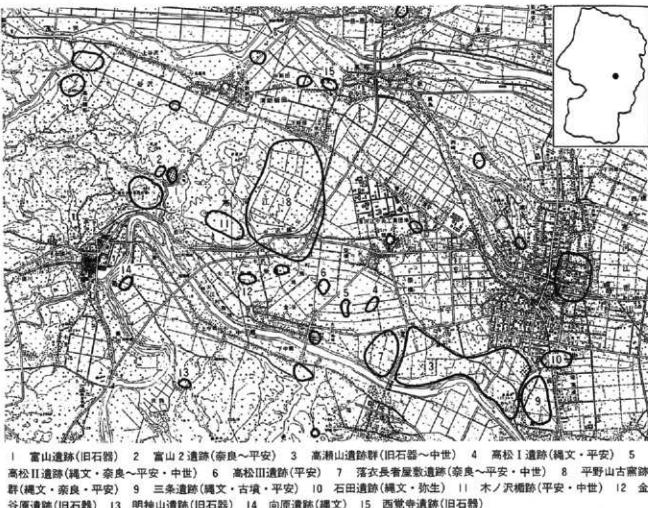
卷頭図版 1	富山遺跡空中写真
卷頭図版 2	II 5C層出土石器
図版 1	遺跡遠景
図版 2	調査風景他
図版 3	調査風景他
図版 4	遺構発掘・石器出土状況
図版 5	石器出土状況・土層断面
図版 6	遺構発掘・石器出土状況
図版 7	土層断面・石器出土状況
図版 8	石器出土状況
図版 9	出土石器(1)
図版 10	出土石器(2)
図版 11	出土石器(3)
図版 12	出土石器(4)
図版 13	出土石器(5)
図版 14	出土石器(6)
図版 15	出土石器(7)
図版 16	出土石器(8)
図版 17	出土石器(9)
図版 18	出土石器(10)
図版 19	出土石器(11)
図版 20	出土石器(12)
図版 21	出土石器(13)
図版 22	出土石器(14)
図版 23	出土石器(15)
図版 24	出土石器(16)
図版 25	出土石器(17)
図版 26	出土石器(18)
図版 27	出土石器(19)
図版 28	出土石器(20)
図版 29	出土石器(21)
図版 30	出土石器(22)
図版 31	出土石器(23)
図版 32	出土石器(24)
図版 33	出土石器(25)
図版 34	出土石器(26)
図版 35	出土石器(27)
図版 36	出土石器(28)
図版 37	出土石器(29)
図版 38	出土石器(30)
図版 39	出土石器(31)
図版 40	出土石器(32)
図版 41	出土石器(33)
図版 42	出土石器(34)
図版 43	出土石器(35)
図版 44	出土石器(36)
図版 45	出土石器(37)
図版 46	出土石器(38)

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

今回の富山遺跡の発掘調査は、東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）の建設工事にもなって行われたものである。遺跡の発見は昭和43年であるが、遺跡の正式な登録は、平成元年度の山形県教育委員会による基礎調査後に行われている。遺跡範囲の一部が東北横断自動車道酒田線の建設用地内にかかるため、日本道路公团仙台建設局山形工事事務所、山形県教育庁文化財課、財團法人山形県埋蔵文化財センターの関係機関で遺跡の取り扱いについて協議した結果、記録保存を行うこととなり、平成7年5月8日から平成7年7月20日まで緊急発掘調査が行われることになったものである。

遺跡は昭和43年に県立寒河江工業高等学校社会部によって発見され、翌昭和44年に寒河江工業高等学校社会部によって発掘が行われた。この時の調査成果は「人工のはじまりの研究 第4集」にまとめられた。その中で、富山遺跡の特色として1、土器及び網文時代と見られるのが1点も存在しない。2、石器包含層は赤褐色粘土層で地表より約70cmの間に最も多く含まれている。3、部分的に円窓を多く含む粘土層があり、その中にも石器が介在している。



第1図 遺跡位置図

4、石器は、一見不定形に見える尖頭器を主体としている。中には斜軸尖頭器もあり、石英岩尖頭器もある。5、石質は硬質頁岩が圧倒的に多い。しかし、石英岩を素材にした石器が存在することは極めて重要である。6、原石は頁岩・石英岩も地層自体に存在する。7、一見、石器の製造場に見えるが、すでに前集でも言及したように近くに持ち運んだと思われる遺跡がない。あくまでも本遺跡は製造場であると共に使用した場所であり、広さから言えば集落址と言える。8、本遺跡の年代は前期旧石器時代に属すると考えられる。とまとめられた。

上記のように、富山遺跡は発見の当初から石刀技術以前の、前期旧石器時代の遺跡でないかと注目され、調査された経緯をもつ。基本的には昭和44年の調査結果が、今回の調査結果と大筋では一致するものと思われるが、今回の調査では、4の斜軸尖頭器は確認できなかった。また、7に関しては、石器製作遺跡であることに關しては同意できるが、集落址という遺跡の解釈に關してはさらに検討すべき点がある。

2 調査の方法と調査の経緯

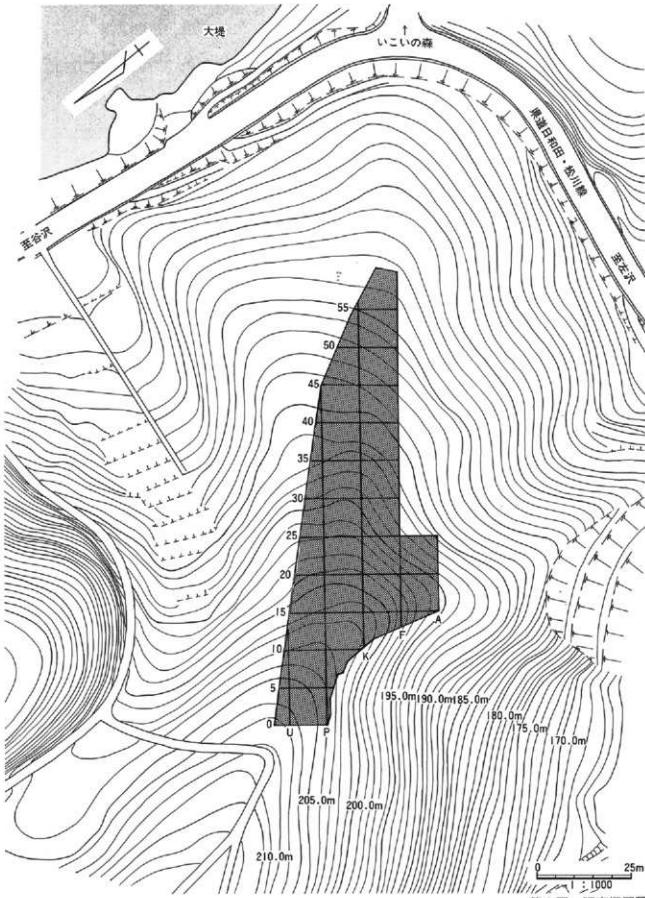
遺跡範囲は、平成6年の山形県教育厅文化財課の詳細分布調査によると東西約180m、南北約150mで、面積は27,000m²ほどと推定された。

5月10日に高瀬山遺跡2期の現場事務所において、平成7年度の東北横断自動車道酒田線に関わる遺跡の合同鍛入れ式を行い、発掘調査を開始した。

表土の除去は業務委託として、鍛入れ式に先行して5月8日から重機で行い、5月26日に終了したが、笹が繁茂している箇所や表土が薄い箇所などは人力で表土の除去を行った。表土の除去が終了した区から、人力による面整理を行った。表土除去終了後は2m四方のグリッドを設定した。表土の除去と併せて、平成6年度の詳細分布調査のさいに、高速道路予定地内で、雑木のために試掘が行えなかった遺跡範囲と推定される北西部部分の雑木の伐採を行ったのち、試掘を行って遺跡範囲の確認を行った。その結果、高速道路予定地内の遺跡範囲のうち、北部の尾根付近は遺物分布が稀薄で、南側に延びる崖地には遺物が濃密に分布することが分かった。

調査区は、東北横断道酒田線上り車線のN74のセンター杭を基準に、長さ120m・幅44mの調査区を設定した。主軸(Y軸)は磁北から51°40'西へ傾いており、南北軸(Y軸)は算用数字、東西軸(X軸)はアルファベットをそれぞれ付して、X軸とY軸の交点から東へ拡がる象限を、それぞれのアルファベットと算用数字を組み合わせてグリッドを呼称した。遺跡が尾根上に立地しているので、安全を確保するため、遺物の分布範囲と地形を考慮して調査区の設定を行った。調査区は北から時計回りに、1区から9区まで細分した。このうち1区は、表土の直下は基盤の凝灰岩もしくは風化した凝灰岩質のシルトで、すでに包含層は無くなってしまったと判断したので、重機による表土除去を行ったのみである。

遺物の取り上げはグリッドと層位を基本として取り上げたが、遺跡が斜面に立地しているため、調査の初期の段階では地層の堆積状況がつかめなかつたことから、出来るだけ平面と絶対高を記録して石器を取り上げるようにつとめた。また、平面と絶対高を記録して取り上げた遺物は登録遺物としてあつかった。登録遺物の中には、偽石器や自然石も含まれている。



第2図 調査概要図

II 遺跡の立地と環境

1 自然的環境

富山遺跡がある寒河江市は、山形盆地の中央を流れる最上川の西側に位置し、山形盆地の西部に位置する。最上川は長井盆地から五百川^{よひがわ}渓谷を経て山形盆地に流れ込み、ちょうど山形盆地に流れ込む大町左^{あさ}沢付近で大きくU字状に曲がる。また、東に奥羽山脈、西には月山・朝日連峰、北に葉山、南東に藏王を望むことが出来る自然景観豊かな地である。

この地には古くは旧石器時代から中世にいたるまで、多数の遺跡が立地しており、このような地に、日本海側の庄内地方と東北自動車道を結ぶ、東北横断自動車道酒田線が建設されたことになった。

2 周辺の遺跡

寒河江市を含む西村山地方では、古くから旧石器時代の遺跡の調査や探索が行われ、岩宿遺跡よりも早くに旧石器時代の遺跡ではないかと注目された朝日町大隅遺跡もそのひとつで、寒河江市金谷原遺跡など学史上有名な遺跡や、数次にわたり調査された西川町お仲間林遺跡などがある。また、この地域では良質な頁岩が豊富に存在する原石産地でもある。付近には、中期旧石器時代と後期旧石器時代の過渡期に位置付けられている寒河江市明神山遺跡や、中期旧石器段階の同市庚申山遺跡や、同市高瀬山花賀場遺跡などがある。

縄文時代は、草創期に人々の痕跡が残され、前期に高瀬山遺跡で大集落が営まれ、中期に遺跡数が増加する。また時期は不明だがおとしふかが高瀬山遺跡や平野山古窯址群遺跡から見つかっている。奈良時代以降になると、東北横断自動車道の建設に伴う発掘によって、資料が増加し、しだいにその様子が明らかになりつつある。

特に旧石器時代に関しては、本遺跡の発見のきっかけともなった、高山法彦氏が指導を行った寒河江工業高等学校社会部の活動により、寒河江市を含む西村山地方の先史時代の遺跡が次々と発見されていった。さらに加藤稔氏を中心にして、石刃技法以前の石器文化の探求が行われ、昭和43年から3ヵ年にわたり、西置賜郡飯豊町上谷地B遺跡が調査され、山形盆地でも昭和44年から寒河江市明神山遺跡が調査された。

上谷地B遺跡は中津川の段丘に立地し、上位から二番目の高位段丘面に立地している。石器は、堆積物である礫層中から、硬質頁岩・流紋岩製の握槌・両刃礫器・方刃礫器・斜軸尖頭器・楕円形石器・円盤形石核などが出土した。出土遺物は、斜軸尖頭器や円盤形石核など中期旧石器時代の様相を示し、理科学的な年代測定でもそれを裏付ける結果が出ている。

明神山B遺跡遺跡は、昭和44年と46年の二回にわたり調査が行われ、石器は段丘堆積物のなかから出土し、上・中・下の三枚の文化層が確認された。上層は両面調整尖頭器、中層は小形の斜軸尖頭器、下層は片刃礫器に代表され、中層の石器群は形態・組成に長野県飯田市石子原遺跡と共通性が見られるという。

III 遺跡の概観

1 層序

富山遺跡の層序は大きく4層に区分した。I層は表土層、II層（II 1層を含めて6層に分層）が遺物包含層、III'層・III層が無遺物層である。

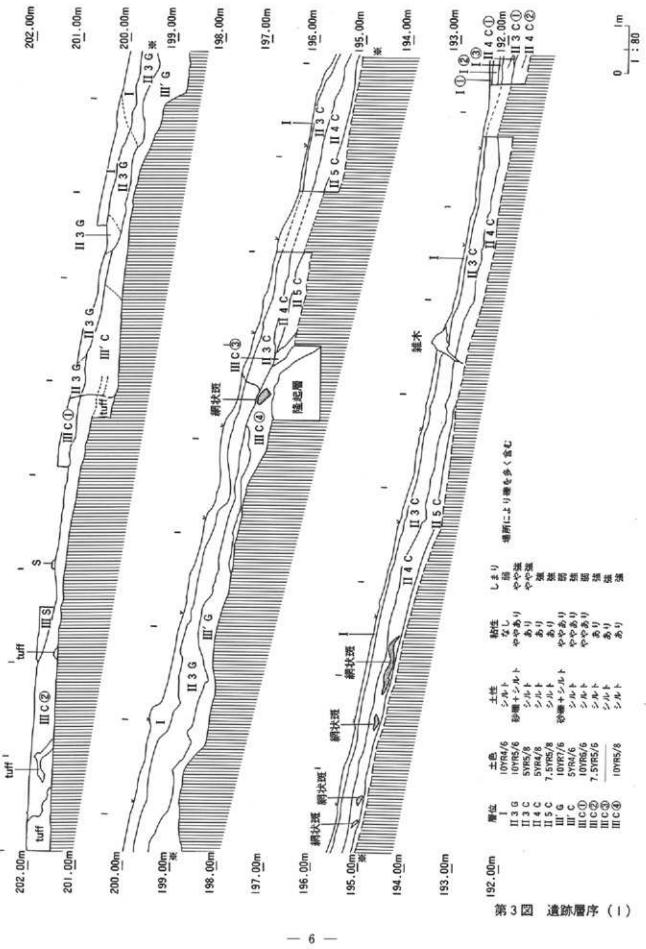
表土除去作業中の遺物の取り上げは、I層を除去したあとなのでとりあえずII 1層として遺物を取り上げた。その後表土除去が進み、II層が現れるにつれ赤色土の層と、シルト質で頁岩や石器を大量に含んだ層があることが分かってきた。それぞれの層の前後関係が分からなかつたので、表土除去の済んだ区から土層確認のためのトレンチを設け、層の前後関係の把握につめたが、そのあいだにも大量の石器が出土したために、粘土やシルトより礫が多い層をII G層、ほとんど粘土やシルトの層をII C層、砂が混じる層をII S層というように、岩相記号を用いて、石器の出土層位を記録して取り上げた。III'層とIII層（無遺物層）についてもII層と同様の基準で分層を行った。また、III'層については、III層を母材とする斜面堆積層（二次堆積層）で、III層の岩相と密接な関係がある。本来ならば「」を付けてない表記にすべきであろうが、III'層自体が無遺物層であることと、III'層自体の分布がごく狭い範囲であることから変則的ではあるがIII'という層序を与えた。当然II CとII G層の形成についても、より下層にあるIII'層とIII層との密接な関係が考えられる。

トレンチの断面観察の結果、II G層とII C層の切り合い関係ではII G層の方が新しいことが分かり、II C層についても当初單一層と考えていたが、調査が進むにつれて2層に分層出来ることが分かった。また、8区と3区を中心に分布する赤色土（II 2層）に関しては、小円礫を含むことや土に縊まりがない、やや腐殖化した傾向が見られることなどから、II G層とII C層が交じり合って表土化したときの層であると判断し、石器包含層（II層）中の相対的な堆積順は一番新らしいと判断した。

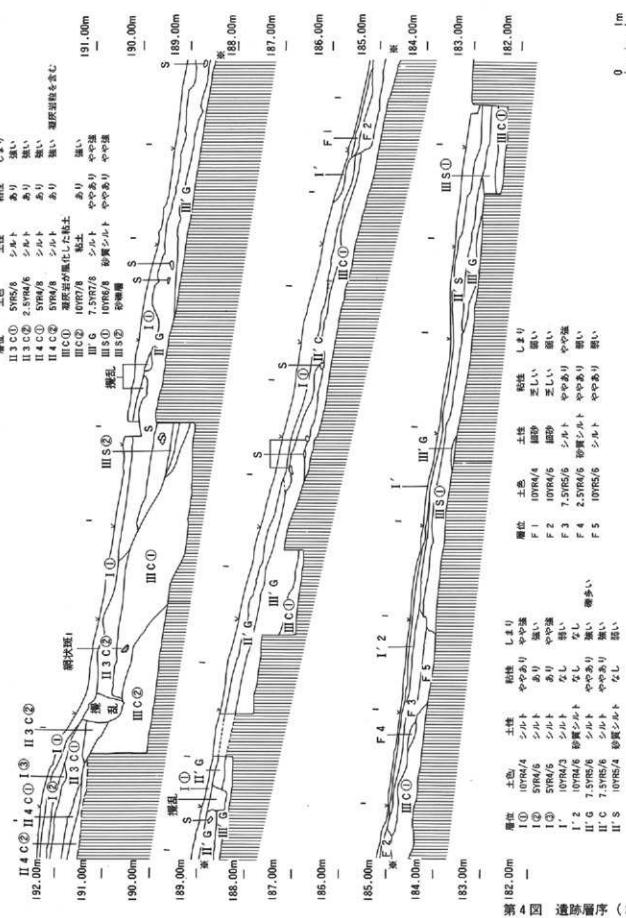
上記のことから、II C層とII G層との関わりでは堆積順の古い方からII 4 C層→II 3 C層→II 3 G層というふうになり、そのあとにII 2層が堆積した。II 2層に関してはII 3 C層とII 3 G層の二次堆積と判断したので、岩相記号を付けてない表記した。その後調査の終盤になってから、III C層と考えていた層からも石器が出土することが分かり、II 5 C層とした。したがって層序全体を整理すると、堆積順の古い方からII 5 C層→II 4 C層→II 3 C層→II 3 G層→II 2層となる。また、遺跡が斜面に立地しているため、それぞれの層は部分的な二次堆積を起こしている可能性があり、その度合いはII 5 C・II 4 C・II 3 C層で少なく、II 3 G層で多く、II 2層はほぼ全域が二次堆積層と考えられる。

それぞれの層と石器の分布範囲をII 5 C層は第89図に、II 4 C層は第77図に、II 3 C層は第76図に、II 3 G層は第13図に、II 2層は第75図に示した。これらの図の層の分布範囲は、土層断面図と遺物を取り上げた際の層位の記録をもとに作成したもので、石器の分布についてはそれぞれの層ごとの石器の分布図（1/20で探録）を1/500に縮めたものである。

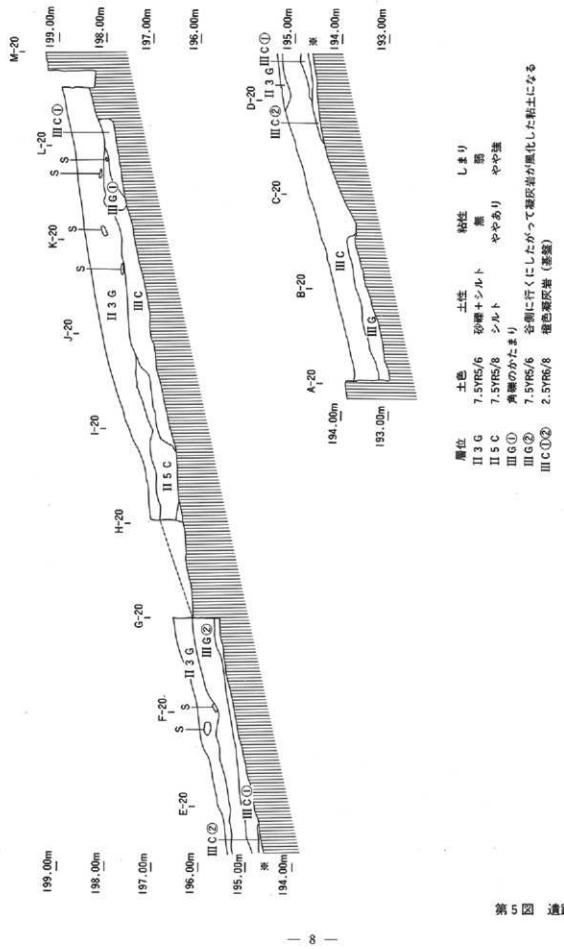
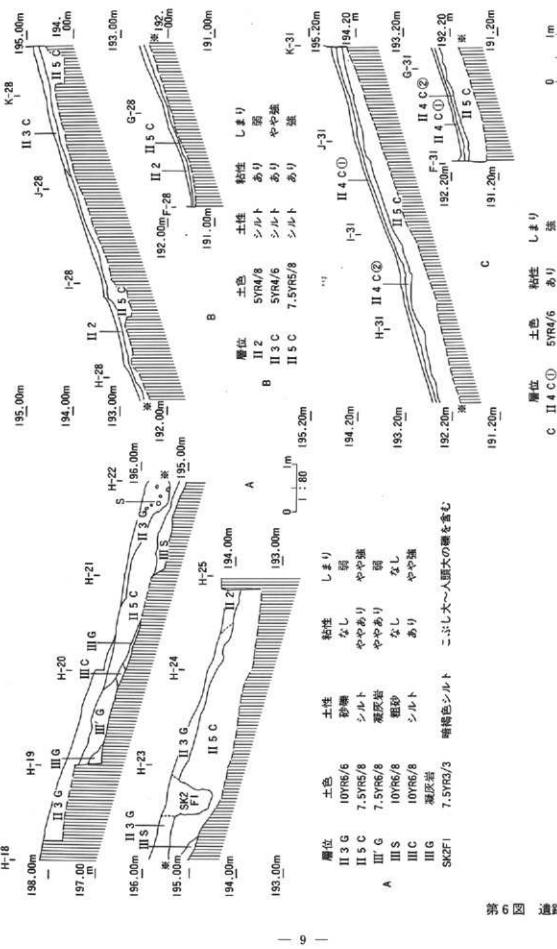
以下に石器包含層それぞれの特長を堆積順の古い方から記す。



第3図 遺跡層序(1)

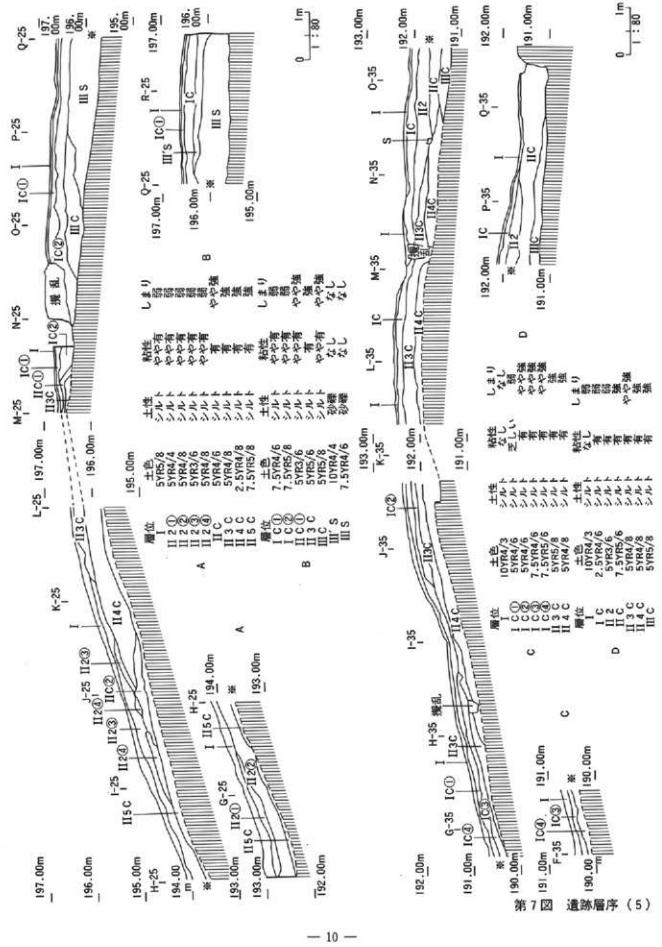


第4図 遺跡層序(2)

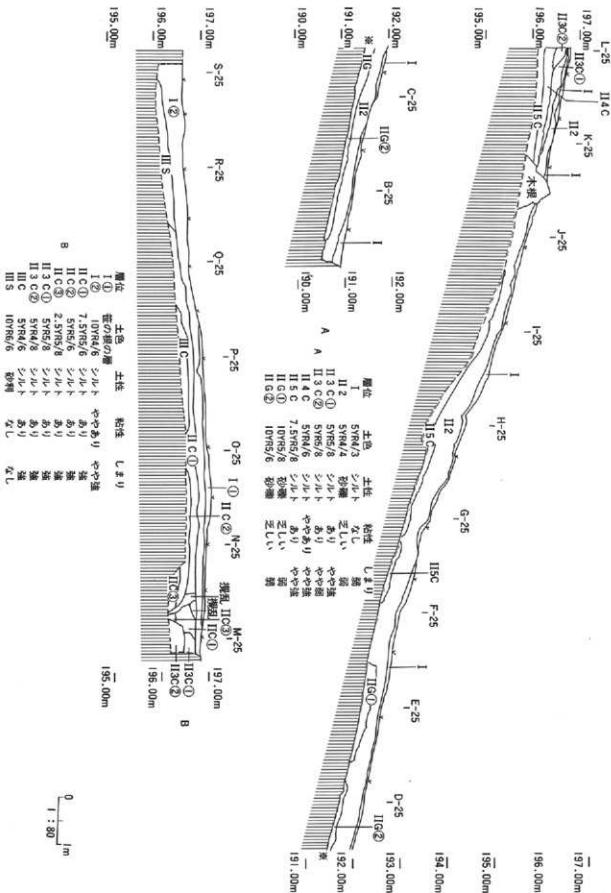
0 1m
1:80

— 9 —

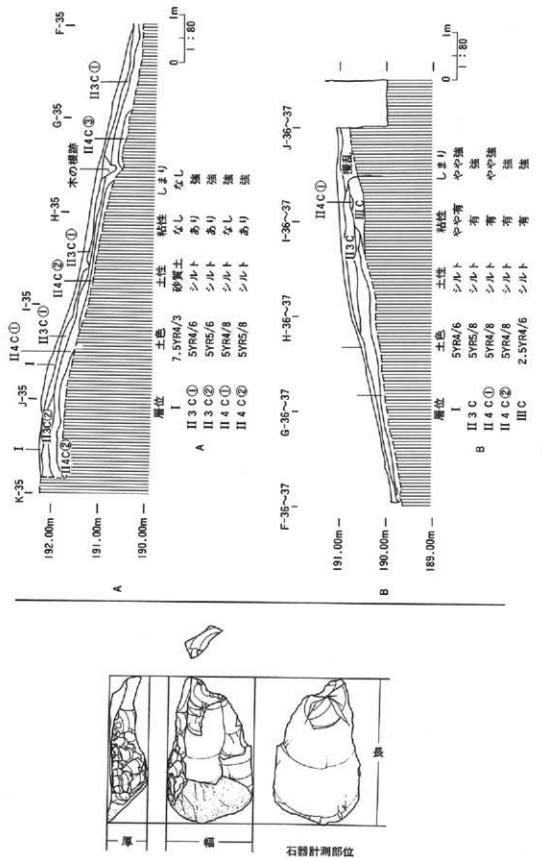
— 8 —



第7図 遺跡層序(5)



第8図 遺跡層序 (6)



第9図 遺跡層序(7) 石器計測部位

II 5 C 層……分布は、9区の一部と8区の南北の尾根の西側に分布する（第89図）。本来はIII C 層として無遺物層と認識していたが、調査の過程で石器を包含していることが分かり、II 5 C 層とした。土色はおおよそ7.5 YR 5 / 6（明褐色）で、土性は粘土またはシルトで粘性があり、しまりが強い。礫はあまり含まないが、含む場合は大きいものでも握り拳大で、ほとんどは直径3～4cmの大円礫で、凝灰岩や安山岩が多く頁岩は少ない。偽石器と認定した資料のほとんどが凝灰岩であった。遺物取り上げ時の注記はII 5で、II 5 C 層出土の登録遺物は37点である。

II 4 C 層……分布は、3・4・8区の一部と7区にかけての南北の尾根から南斜面に分布する（第77図）。石器は7区のやや平坦な所に集中する（石器集中地点1）。土色はおおよそ5 Y R 4 / 8（赤褐色）の赤色土で、土性は粘土またはシルトで粘性があり、しまりが強い。礫は石器集中地点1に多く、人頭大の大きさの円礫で、やや粗粒で、磨減度の少ない、がさついた部分的に凝灰岩粒を含む。遺物取り上げ時の注記はII 4で、II 4 C 層出土の登録遺物は2267点である。

II 3 C 層……分布は、3・4区と7・8区の境の尾根を挟んで分布する（第76図）。土色はおおよそ5 Y R 5 / 8（明赤褐色）でII 4 C と同じく赤色土である。土性は粘土またはシルトで粘性があり、しまりが強い。礫はあまり含まず、II 4 C 層より凝灰岩粒が少ない。石器は尾根の東側斜面（3・4区）に散漫に分布する。遺物取り上げ時の注記はII C・II 3・II C 3で、II 3 C 層出土の登録遺物は77点である。

II 3 G 層……分布はほぼ9区に限られ、南北と東西に伸びる尾根に開まれた崖地に分布する（第13図）。面的には、小平坦地と斜面で構成されている。その小平坦地に石器集中地点4（III-2 参照）が存在する。土色は場所により異なるが、9区の中央部付近では10 Y R 5 / 6（黄褐色）で、土性はシルトで、石器と円礫を含み、その度合いは場所により異なり、粘性は礫の混入の度合いにより異なるが、礫の混入の度合いの少ないところは粘性が強まる。円礫のほとんどは頁岩で、大きいもので人頭大の大きさで、それ以上のものは少ない。それら円礫の起源に関しては、地山層中の急傾斜した（発掘区北側の農道沿いの露頭で観察できる）第三紀の砂礫層（第3図）が考えられ、帶状に調査区を横切ると考えられる（阿子島他1996）。そのほかは石英や鴻殻、珪化木、黒曜石を含む。層厚は厚いところで約60cmほどある。

堆積の様子や層相から二次堆積の地点も考えられるが、石器集中地点出土遺物の中には、接合資料31-1（第14図参照）や57-5などの接合資料があることから、場所により一次堆積層の存在する地点もあるものと思われる（石器集中地点4・5・7などは、接合資料を含むことや、小平坦地に位置することから、原位置を保っていると考えられる）が、発掘時点では両者を明確に分層して遺物を取り上げることは出来なかった。そのため、この層出土の石器の中には、ほぼ原位置を保っていたものと、原位置を失ってしまったものの、両者の存在が考えられるが、前述の理由により両者を明確に区別して資料提示することが出来なかった。二次堆積層の存在は、表土化していた時期がたびたびあったということでもあり、後世の遺物が混入しやすいということでもあるが、一次堆積の部分と二次堆積の部分を分層する事は出来なかった。

遺物取り上げ時の注記はII G・II 3・II G 3・II 1で、II 3 G層出土の登録遺物は1,417点である。また、II 3層の登録石器は31点で、II 3 G層またはII 3 C層に含まれる石器である。

II 2層……………分布は8区と3区の斜面に分布する。土色はおおよそ5 YR 4／8（赤褐色）である。土性はシルトで粘性はやや有り、しまりは弱い。本来、3区のII 2層も包含層と考えられるが、重機による表土剥ぎの段階で、表土と一緒にII 2層を削いでしまったため、どのような状態で石器を包含していたかは不明である。また、この層は、8区の遺物分布（第75図）を見ても分かるように、石器の分布が等高線と直交していることや小砾を含み締まりもないことなどを考えると、二次堆積層で、出土石器（石器集中地点2）も原位置を保っていないと考えられる。遺物取り上げ時の注記はII 2で、II 2層出土の登録遺物は1,939点である。

また、上記の層とは別に、遺物の取り上げの段階で便宜的に名付けた層名（II 1、II' 層）があり、その説明を以下に記す。

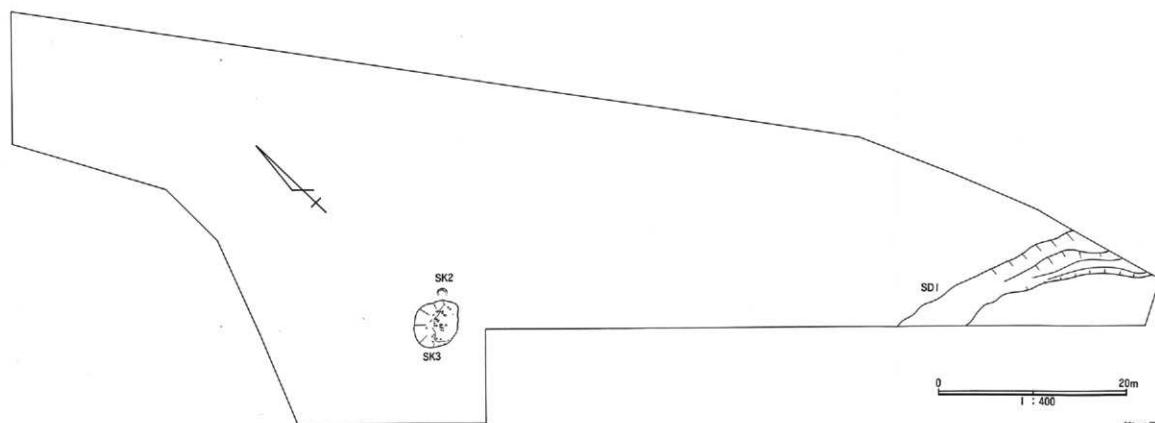
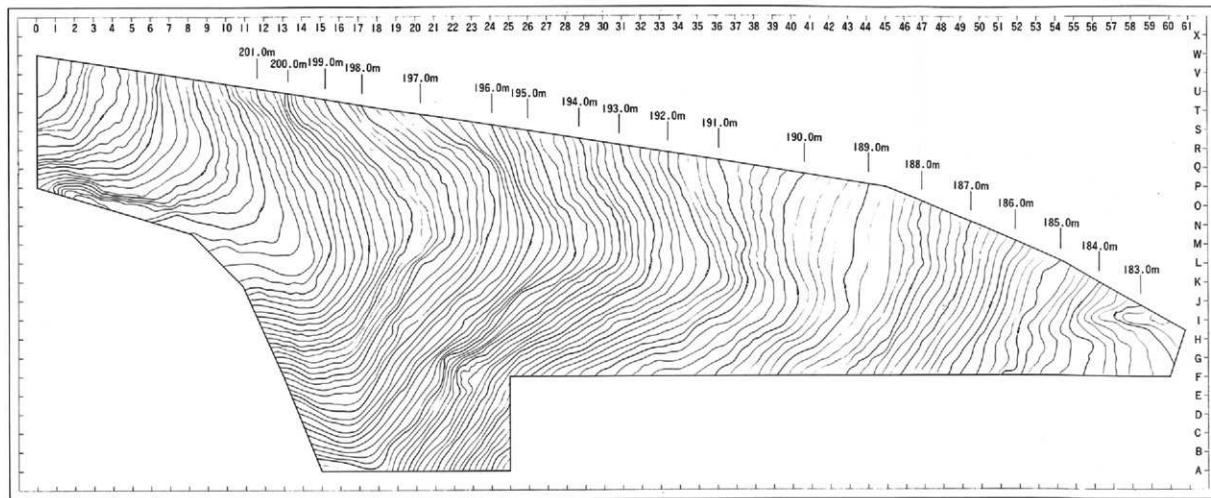
II 1層……………本来は存在しない層位で、遺物を取り上げるために便宜的に付けた層名で、本来はII 5 C層～II 2層のいずれかの層に属する石器である。資料整理の段階で、II 1層として取り上げた石器の、本来包含されていた層位の復元を行った。その結果、そのほとんどがII 3 G層に属することが分かった。石器計測表中の層位で、II 1（II 3 G）とあるのは、II 1層として取り上げた石器を、資料整理の段階でII 3 G層出土に復元したものである。II 1層の登録遺物は789点である。

II' 層……………II 2～II 5 Cのいずれの層かはつきりしない（同定）できなかった層である。第4図のII' G・II' C・II' S層にあたるもので、81-1・3の石器などは縁刃がローリングを受けていることや、堆積の様子などからII 2～II 5 C層の二次堆積層と考えられる。II' 層の登録遺物は690点である。なお、赤色土については付編IIIに、山田一郎氏の考察があるので参照していただきたい。

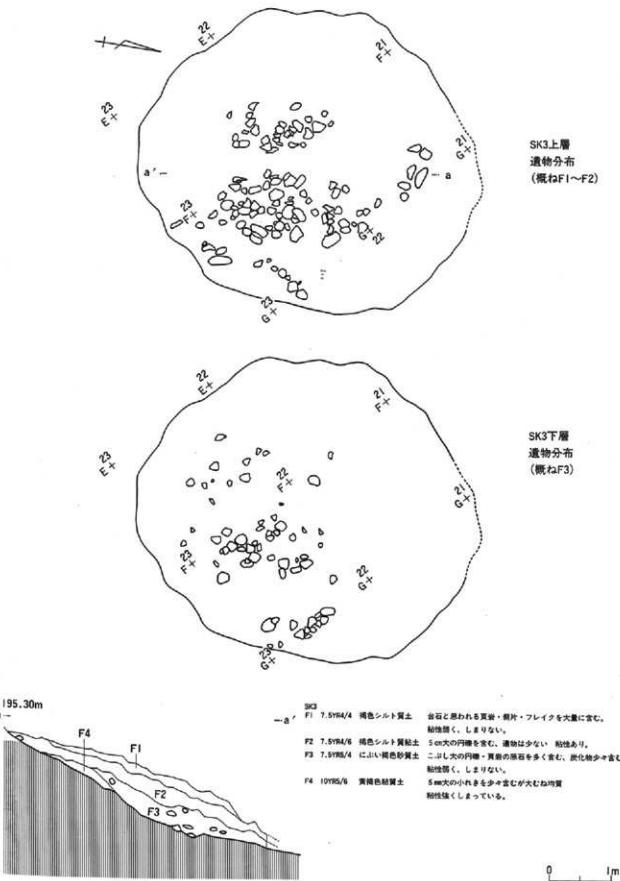
2 遺構と遺物の分布

今回の調査で、遺構に関しては、5・6区にまたがり溝跡（S D 1）1基と、9区から土坑が2基確認された。

また、現地調査段階で、「石器集中地点」と呼称して遺物の取り上げなどの記録を行った地点がある。これは、ほかの箇所よりも、面上に石器が集中している範囲を視覚的に認識して括ったもので、その範囲に関しては厳密なものではない。当然、それぞれの石器集中地点の中でも石器分布の密度に差があり、さらに細分出来る可能性があるが、ここでは現地調査で認識した範囲をそのまま踏襲した。現地調査段階で7区で1ヶ所、8区で1ヶ所、9区で5ヶ所の計7ヶ所の石器集中地点が確認され、それぞれ石器集中地点1～7と呼称した。これらについては、平面図と絶対高を記録して石器の取り上げを行った。その後の資料整理の段階で、9区のII 3 G層で、上記の5ヶ所の他に、結果的に石器集中地点であろうと考えられる地点（第13図）が出てきたが、それらについては、現地調査時点での認識できなかったということで、追加で石器集中地点の番号を与えることはしなかった。



第10図 遺構配置図



第II図 SK3平面・断面図

また、石器集中地点1～7のなかでも、その成因や性格に関してはそれぞれ異なると考えられる。以下にそれぞれの石器集中地点の概要・所見を記す。

石器集中地点1……II 4 C層に包含される地点で、接合資料やハンマーも出土していることから、石器製作などの生活の痕跡が残されていると考えられる。ただ南西部は、表土（I層）の直下なので擾乱を受けている可能性がある。この地点は、出土地点と絶対高は光波を用いて記録を行い、2,240点の石器の記録を行ったが、データの入力ミスにより、正確な出土地点と絶対高を出力できなかった。しかし、遺物取り上げ時にグリッドを記録しておいたので、計測表にはグリッドを記入した。

石器集中地点2……II 2層に包含される地点で、層相から層自体が二次堆積であると考えられるので、石器自体も本来の原位置を保っておらず、生活面も無いと考えられる。1,053点の遺物について平面と絶対高的記録を行った。

石器集中地点3……II 3 G層に包含される地点で、SK 3の全面を覆うような状態（図版5）で確認されたものである。石器のほかに、人頭大の貝岩の円礫を含む。多少の谷方向への石器の流れ込みがあるとは思われるが、そう大きな動きはないものと考えられる。接合資料も複数出土しているが、石器集中地点3自体が何らかの活動の場だったのか、何らかの行動の結果出来たもののかは明らかに出来なかった。742点の遺物について平面と絶対高的記録を行った。

石器集中地点4……II 3 G層に包含される地点（図版6）で、比較的平坦で、シルトの固い面上に石器が分布する。ハンマーストーンや素材となりうる貝岩の円礫、接合資料も複数出土していることから、この地点では円礫の粗削りや石器製作を行った可能性が考えられる。1,164点の遺物について平面と絶対高的記録を行った。

石器集中地点5……II 3 G層に包含される地点で（図版37・38）、第31・32図にある石器を中心とした地点である。地点4と同じように、比較的平坦な部分に位置する。第14図にあるように、径約1m弱の範囲から、ほぼ円礫まで復元できる接合資料が出土している。この地点では円礫からt o o lを製作していたことが考えられる。地点4と近接しており、機能時の大きな時期差はあまり無いと考えられる。むしろ、ほぼ同じ時期に、それぞれの地点で石器製作が行われたと考えられる。121点の遺物について平面と絶対高的記録を行った。

石器集中地点6……II 3 G層に包含される地点である（図版6）。II 3 G層の分布範囲中でも、絶対高い高い地点に位置する。石器の分布数は少なく、分布範囲も狭い。この地点出土の登録遺物の中には、接合資料は無いが、近くのグリッドからは接合資料が出土していることから、一次堆積層と思われる。13点の遺物について平面と絶対高的記録を行った。

石器集中地点7……II 3 G層に包含される地点で、比較的緩斜面に位置する（図版6）。この地点の層は、シルト質で粘性があり、しまりがある。地点6と同じように、この地点出土の登録遺物の中にも接合資料は無いが、近くのグリッドからは接合資料が出土していることから、この地点も一次堆積層と思われる。59点の遺物について平面と絶対高的記録を行った。

IV 検出遺構と出土遺物

1 検出遺構

S D 1（第10図・第4図、図版4）

5区と6区にまたがるように検出された。覆土は細砂またはシルトで、粘性に欠け、しまりは弱い。ほぼ東西方向に延び、西から東へと傾斜している。断面はゆるやかなボウル状をなす。

覆土には、細砂やシルトを含むことから、おもな堆積の要因は人為堆積ではなく、水成堆積が考えられるが、年中水が流れているという状況ではなく、降雨時などに周囲の水が流れ込んで細砂やシルトを堆積させたと考えられる。覆土の中からは石器が出土したが、これらの石器は、尾根側の石器包含層からの流れ込みと考えられ、SD 1の機能時を決定できるものではない。SD 1が掘り込んでいる層自体が、石器を包含している層の二次堆積と考えられるものなので、SD 1が機能していた時期は、それぞれの石器集中地点が機能していた時期よりもずっととの時代が考えられる。

S K 2（第6図A、図版5・6）

9区のH-23グリッドで検出された。確認のきっかけは土層確認のトレンチで、断面にあらわれたため確認できた。すでにある程度II 3 G層を掘り込んでしまってからの確認であるが、II 3 G層中からII 5 C層を掘り込んでいると思われる。確認できた縦断面は、ほぼU字状をなしている。横断面は、半分がトレンチにより削り取られてしまったが、ほぼ円形をなしていたと推定される。深さはII 3 G層上面の確認面から約95cm、幅は約85cmをはかる。最大へ人頭大の貝岩の円礫を含む。石器については、片削が出土したが、石核やt o o lは出土していない。覆土の状況は、時間をかけて自然堆積したような状況ではなく、一気に人為的に埋められたような状況を呈する。性格は不明である。

S K 3（第10・11図、図版5）

9区のE～G-21～23グリッドに位置し、石器集中地点3の下部にあたる。平面形はやや南北に長い梢円形をなす。長径は約5.6m、短径は約4.9mである。縦断面は、斜面に対してくぼんでおり、あさい凹形をしており、本来あった斜面の窪地を利用して、若干III C層を掘り込んで形づくっていると考えられる。覆土は、尾根から斜面方向に堆積しており、F 1～F 4までの4層に分けられる。それらは、層相からF 1・F 2～F 3・F 4とに大きく三つに分けられる。F 1は、石器集中地点3との区別が明確に出来ない層で、SK 3の覆土であると同時に、石器集中地点3を構成すると考えられる。F 2～F 3は、約5cm～人頭大までの貝岩の円礫を含み、登録したものでF 3からは113点、底面からは75点が出土した。一般に、粘性が弱く、しまりも弱い。SK 3の性格としては、以下の理由により原石の集積穴（場所）と考えられる。円礫の大きさがほぼ15～20cm大のものが多く、大きさに均一性が見られ、礫のほとんどが貝岩である。石質はほぼ均質で、II 3 G層出土の螺素材の不定形石器の素材として、適当と考えられる。堆積は、斜面に対してやや寝んだところに、貝岩原石を集積し、それを覆うように覆土が自然堆積し、その上面が石器集中地点3として機能したと考えられる。

2 出土石器の器種分類

(1) 富山遺跡の石器群の様相

富山遺跡の石器群は、膨大な量と、従来見慣れない形態の石器が特徴的である。その石器群を理解するために、以下のように器種分類を行った。

富山遺跡の石器は、大形石器と小形石器、定形石器と不定形石器（形態が直感的に把握できない石器）という2種類の質的に違う属性の集合体である。そこで最初に定形石器を抽出して分類した（12-1図と12-2図）。次に量的に多い不定形石器は、その刃部の形態から分類を行った。分類の結果、刃部は尖頭形、凸形、直線形、ノッチ（12-3図と12-4図）に分類した。これらの刃部と、素材の用い方や大きさなどは何らかの関係がありそうだが、ここでは明らかにできなかった。したがってこの分類の中には、本来一緒の石器の形態変異であるものも含まれる。

(2) 器種の分類

I類：ヘラ状石器（12-1図1～7）

幅広の横長剝片を素材に、幅の広い剝離、小さな深い剝離、深い通常の剝離などで側辺を成形し、器体の軸の半分以上の側辺を取り込む定形石器である。また、器体の軸に対して刃部の刃が左肩上がりになるように成形されている（12-1図2、3、5）。きちんとした製作技法が観察される石器で、宮城県の事例からも前期旧石器時代を特徴づける重要な石器である。

II類：クリーバー（12-1図8～11）

縦に長い素材の短辺にやや凸形の刃部をもつようにして、側辺を深い交又剝離で成形した定形石器。刃部は素材の側辺を利用するが、加工により刃部を凸形に成形する場合もある（図12-11）。刃部長は器体の1/3以下である。ヘラ状石器とは、形態と刃部のあり方が違う。8は大きさからいえばヘラ状石器に近いが、技法的にクリーバーに分類した。

III類：両面加工尖頭器（12-1図12～15）

形態の異なる2種類の尖頭器が出土している。細長い形態の12とやや寸詰まりの形態の15である。幅広の深い剝離面で交又剝離によって側辺を形成している。

IV類：両面体石器（12-1図16～19）

きれいな両面体石器が出土している。両面加工尖頭器と両面体石器は大きさで区別した。16は基部が欠損しているが、17と同じ石器の可能性がある。18は厚い素材に丁寧な加工をした両面体石器である。19も17の形態変異の可能性がある。両面体石器の分析は剝片分析によるところが大きいので、それは今後の課題である。

V類：粗雑な両面体石器（12-2図1～3）

大きな剝離面で成形された、やや粗雑な両面体石器である。完成品なのか、それともこれから加工が進み丁寧な剝離が施されるのかは今の段階では判然としない。しかし形態や剝離のあり方はIV類に類似する。

VI類：分厚い素材の両面体石器（12-2図4～8）

ごろごろした分厚い素材を幅広の深い剝離で加工して、先端（図の天の部分）が交又剝離のやや鋸齒状の分厚い刃部を形成する石器である。6と7の接合資料は円錐から製作される全工程が分かる接合資料であり、剝離の工程や剝離面などからこの種類の石器が核石ではなくこれ自体が「石器」であることが明らかになった。従来の日本の前期・中期旧石器時代の遺跡では、製作工程が分かる資料としては未発見の資料である。

VII類：剥片製の搔器・削器（12-2図9～21）

面が平らな剝片を用いて、多様な搔器・削器が製作されている。後期旧石器時代にも見られる円形搔器（9、10）、剝片の長い側辺に刃部を形成する搔器（11、12、13）、剝片の長い側辺に刃部を形成する鋸齒状削器（14、15、16）、剝片の一部に搔器の刃部を形成する石器（18）、ノッチ（17、19、21）、薄い剝片を素材にした鋸齒状削器（14、15、16、20）などが出土している。後期旧石器時代との違いは、比較的分厚い素材と刃部を持つことと、刃部がやや鋸齒状になることなどがあげられる。その要因はハンマーの使い方による剝離技術の差、剝片剝離技法の差が推定できる。資料中に石刃技法に類似した接合資料（96図2、3）などがあるが、剝片石器からは、石刃技法類似の剝片剝離技法の存在は否定される。

VIII類：尖頭石器（12-3図1～8）

縦の一端に大きくして深い交又剝離で尖頭部をつくる尖頭彫器（1、2、3）、片面から急角度の深い剝離で加工して、小さな尖頭部を形成する尖頭状石器（4、5）、丸太のような縦の一端に深い交又剝離で小さな尖頭部をつくる三稜彫器（6、7、8）がある。それぞれの尖頭部は素材の選択と加工技術によって作り分けられた可能性がある。

尖頭彫器は、厚さが幅の1/2以下の扁平なプロボーションの縦を素材とし、扁平ながら重量感のある縦が選択される。剝離は幅広で深く、交又剝離によって尖頭部が形成される。尖頭状石器は片面が平らな素材が選択され、深い急角度剝離によって短い尖頭部を作る石器である。その一端に深い交又剝離を行って分厚く頑丈な刃部を形成する石器である。

IX類：凸刃石器（12-3図9～11・12-4図1～6）

刃部が凸刃になる石器である。凸刃の平面形態の変異は数種類ある。9は尖頭石器に近いが、先端の開き角（図の天の部分）が90度を越えるので、凸刃石器とした。凸刃を形成する弧が内湾し、片面加工も特徴である。10は刃部が弧状の凸刃石器である。裏面の加工は刃部加工の打面を作るための加工である。刃の側面のジグザグは大きくなない。12-4図1は12-3図11に近似する石器である。その違いは刃部の長さに対する形態の軸の長さの関係による。前者は横長の形態、後者はすんぐりながら縦長の形態である。両者は同じ石器の形態変異の可能性がある。12-3図2は、縦の一端に大きな剝離と小さな剝離で尖頭部を2ヶ所作り出すが、凸刃の張り出しの弱い石器である。12-4図3と4は尖頭部の張り出しが1ヶ所で、凸刃の張り出しが弱い彫器である。12-4図5と6は鋸齒状の凸部が3つ以上ある凸刃彫器である。

縦の一端に深い剝離で凸刃を作る石器をまとめたが、刃部の張り出しの程度、鋸齒状の程度などが多様である。この類の石器が富山遺跡では最も多い。この類の中で、さらに規則性のある刃部と、形態との関係を見つけることは重要な課題である。